

照屋行雄著

『企業会計の構造』

(税務経理協会・2001年・3400円)

静岡産業大学助教授 松 井 富佐男

現代社会において企業会計の果たす役割は極めて大きい。企業の取り巻く各種の利害関係者が、企業の財務内容を正しく判断し、合理的な意思決定を行い得るためには、企業会計の提供する有用な会計情報が基礎とならなければならない。このような社会的機能を果たす企業会計は、社会科学としての固有の論理と構造をもっている。企業会計の構造は、技術的構造と理論的構造の2つから構成されている。そのうち、企業会計の理論的構造は、利害関係者の情報要求に応じて、特定の会計目的を達成するための概念的フレームワークのことである。

さて、この度、企業会計の理論的構造に関する注目すべき研究書が刊行された。本書は、著者の照屋行雄教授が長年にわたって、真摯な理論的研究を積み重ねた成果を取りまとめたものである。本書は、全体で5部15章から構成されている。すなわち、第一部「方法論的考察」、第二部「構造論的考察」、第三部「基準論的考察」、第四部「情報論的考察」および第五部「制度論的考察」の5部に、各3章を収めて合計15章となっている。

第一部「方法論的考察」においては、企業会計の理論的研究に当たっての方法論について述べている。そこでは、本書における企業会計研究の対象領域とその研究方法を説明し、筆者の分析視座を明確にしている。第二部「構造論的考察」では、企業会計の準拠枠となる会計原則について、理論構造

的分析を行っている。ここでは会計原則の一般理論的フレームワークを試論的に提示した後、わが国「企業会計原則」の基礎構造を分析している。

そして、第三部「基準論的考察」では、会計原則を構成する重要な会計ドクトリンおよび会計基準について、その性格と機能を真実性の原則との関係で分析している。第四部「情報論的考察」では、会計情報のディスクロージャーの視点に立って、開示される会計情報の情報特性や開示システムについて基礎的考察を行っている。とくに、アメリカ財務会計基準審議会（FASB）の財務会計概念フレームワーク（SFAC）を検討することによって、外部財務情報開示の理論構造を究明しようとしている。最後に第五部「制度論的考察」では、現代会計を特徴づけている会計基準の国際的調和化や企業会計制度の国際比較を通じて、企業会計の制度的構造を明らかにしようと試みている。

本書を通じて筆者が追求しようとしているものは、究極には企業会計の真実性とは何かということに尽きる。そして、本書で採用された5つのアプローチによって企業会計の構造を理論的に究明した試みそのものが、本書の大きな特徴となっている。評者として一点だけ指摘するとすれば、最近の企業会計の制度的変革を基礎づけている新しい概念や研究アプローチについて、さらに考察を深めることを期待したい。